

~ 1
4410



へ1
4410

門 へ1
號 4410
卷

遊江吟序

興雅而蕪者。唐律也。温厚而正

者。國風也。婉曲而簡者。俳歌也。

皆作者所難也。盖興雅而不華

則艱澁也。温厚而不正。則柔媚

昭和九年
十月八日
購求

遊江吟序
也婉曲而不簡。別迂濶也。故雖
其一。亦乏其才。况旅三而善焉
乎。

孤立道人我。公和尚淨業餘暇。
歷賦江府名區勝地。一百餘首。

其詩皆七言律。必以國風作歌
各一首附之。目曰遊江吟。以授
其徒。嗟覩其能寫種種之風景。能
說種種之生理。以彰古今盛衰。以
論道俗賢否。而寓勸懲黜陟。

之意總無有不引物連類而為
碑人履仁仗義禁驕節樂以沐
昇平之化者矣而自 和尚乎
生著述辨難攻擊大有功于名
教者觀之則如此編實是批糠

土苴也。雖然此為心使其徒調
和唐律國風俳彩公無所謂艱
澁柔媚迂濶之患。可謂風雅之
模範矣。况至其才詠三以美人
之所不能為何不以上梓而傳海

内故為之序敢勵其徒云

安永三年甲午秋八月

信小神龍山人嶺千丈和南

操筆江府僑居



附言

一孤立道人乘興坐馳斐然成遊江吟

唐律國風俳歌各一百八十首今應

予需以梓其半

一其為詩也不學攀步其為歌也無倣

貫曠其為俳也非尚芭口唯述望風

情以使入解頤

一武都南北東西比屋二十餘里城中
郭外寺社林川名區勝地何盡于此
惟賦遊步飽觀處也
一善形其難容能摸其難寫乃使詠吟
者猶目擊雲烟且有所風刺而盡情
可謂騷人思無邪矣

釋大定

遊江吟

江北釋大我撰

武陽城

武城一望郭連天
官路浪飄似大川
濟濟金輿拂霞往
駸駸玉馬振風還
芙山高峙虎門上
墨水長流龍闕前
文物清明真樂土
柳營輝日幾千年

春家たちをいふは四と云ははつはるの都なりきり
四方よりよきまゝに降りたるよ

東叡山

巍巍東叡武城良 碧樹垂枝精舍寬
佛殿祖樓輝漢際 神宮台廟映雲端
廊回庭上珊瑚檻 塔立山中瑪瑙盤
門路無塵華色淨 風煙萬里入林寒

と云ふに忍の園はさむらうあきくはるのゆふを
顔のよほいよむと降は極あけ

不忍池

周池十里水連圻 孤嶼浮中似彩雲
殿聳高標垂錦幄 門跨小路拂塵氛
影浮深水紅楓映 香散微風白藕薰
天女買貧多少客 低頭齊唱祝詞文

志のちよれ池の蓮ハ舞と累も妙なる色も錦をく是也
多きを責むまてくる蓮のつね

浅草寺

金龍山上白雲廻 玉殿聳天瑞景開
墨水流光動祇樹 藜堂風色接神臺
散錢聲似臨時雨 步陞響如終日雷
間立南門遥眺望 浪飄士女誦經來

ぬーとうあまの糸やにねく露りまのやもこれやう月を

ゆりもくもくく〜後のゆるま

姥池院

姥池岸上絶人煙 殊潜金龍張法筵
千樹影沈如画水 百華葩散似浮船
蛙啼霖雨多蝙蝠 鷗舞回風少杜鵑
往古孤庵常枕石 只今唯見妙香蓮

ひる家ハ石のまゝにあり波とらねを登りてせり也水
しめしはわきとてしむしせり也

真土山

聖天眞土景風寒 四顧山林添一歡
武郭廣觀青樹上 文峰高望白雲端
河流濺濺接千里 田麥蒼蒼連萬巒
秋夕吟行斯待月 悠然自作画中看

夫去乙卯之夏予遊此山... 武川系に子なるあり

夕城や月乃生... 響出天

紅葉寺

禪師何事愛楓林 流俗結交思斷金
前苑華紅掌不問 後庭柳綠更無尋
日會酒氣侗然坐 時噏草煙莞爾吟
若使達磨遊此寺 應張白眼振雷音

とみちうと見ふる人涙子の事此あもるも秋のゆふ風
柳のまふふ葉かへりて寺のまを

古佛原

東望佛原景可憐 北邙隣道柳含煙
野中暴日刑人骨 路上翻風乞者筵
夕照閑林影浮水 晚鐘遊里響連天
吟行對此悲無極 送葬哭聲雜管絃

何れ病の多かりたるはしく客をばら海なる身をとおもはるる

何れ病の多かりたるはしく客をばら海なる身をとおもはるる

朝茅原

朝望茅原尚有霜 漸遊泉寺逐風光
鏡池魚躍影漸動 墨水鳥飛響頰颺
一硯茶旗飄佛殿 百銅麥飯飢僧堂
醉歌長振禪林去 間路浮煙起北邙

人たけおそくそよふれくおそくおそくおそくおそくおそく
おそくおそくおそくおそくおそくおそくおそくおそく

松崎亭

緩歩松崎望墨川 微風吹送湊樓船
紅顏競色皆歌舞 白首爭聲都管絃
戲燕銜華翻艸上 遊鮎衝浪鯨垠前
亭盛菜飯勸蘭酒 日使嘉賓至暮天

あつたにそよふれくおそくおそくおそくおそくおそく

墨水渡

墨水渡

墨渡常浮五六船 經行日夜幾千還
清風吹拂響如雨 明月照臨影似煙
詠鳥遊人多 鼓柁 釣魚戲者更依舷
視聽為樂徐之岸 稅合徂徠是四錢

あまのこころをこころとていひてのふとてはあつてはるるなる鳥
都のさきさきとてあまのこころとていひてはるるなる鳥

木母寺

春風拂帆出樓船 漁父鼓舷歌墨川
鷓鴣一聲振寺鳴 鴛鴦百羽動鐘淵
柳垂小社葉光冷 櫻聳高堂華色鮮
醉後親聞梅子塚 流言千載使人憐

ふきははあまのこころとていひてはるるなる鳥

梅のうらみとていひてはるるなる鳥

秋葉林

一入閑林心地安 盆池浮艇坐交歡
春遊間路櫻華白 秋耽假山楓葉丹
猿叫樹中猶乞菓 人跳樓上且加餐
紅顏強酒起歌舞 皆醉不知晚景寒

春日の花乃あそびて後なきや秋葉は暮より人ちかゝる
 集ふる葉よりくもふる雲は日さす

靈山寺

檀林一寺號靈山 疑見釋尊在殿間
 庭上水田浮月淨 門前風樹散華殷
 螢飛艸路正焦思 雪積竹窓更洗顏
 縱向蓮華開妙法 經行必乘紫雲還

あまのりまらふあまのりまらふ法よりよきあまのりまらふ寺

あまのりまらふあまのりまらふあまのりまらふあまのりまらふ

菘菊寺

蕭寺拂塵布彩筵 金杯玉枕列床前
 菊華光色輝山下 菘葉氣香薰水邊
 士女群爲狂舞造 僧尼集和醉歌還
 住持背佛馳南北 時向遊人吹草煙

風はなしく萩の葉に松あり落る多し松はきこくも
まくといやくちる寺は無相撲

龜井社

春日逍遙龜井涯 松風吹拂社頭霞
高橋倚聽櫻林鳥 長廡迴看梅樹華
鳳殿臨池歌詠響 烏門跨道往來譁
管神垂跡為冥護 常起炊煙數百家

はくしより花を梅は葉を油やき之はりふる
梅うゑまのいささきとてはく哉

臥龍梅

一株梅樹十餘丈 枝入土中龍臥田
葉似青雲輝博地 華如白雪馥高天
王公稱號聞千里 士女詩歌見萬篇
若有風流遊戲客 清香庵主肆茶筵

に不しるの香しき人多しぬも花の梅の枝さくく白妙の身
上様はまゝにて梅のなまじり

吾妻林

武尊飾怒自東征 海窓花姫哭更迷
淚雨澍來降怨賊 悲風吹去稱吾妻
狐祠幣聳神門立 楠樹枝奔社地低
遠寺鐘鳴旋古廟 寒鴉振翼一聲啼

いかに花の香しき人多しぬも花の梅の枝さくく白妙の身
上様はまゝにて梅のなまじり

羅漢寺

碧林繞境道場寛 假作祇園精舎看
五百應真連級座 一三尊像坐山壇
田涯刈艸開樓閣 庭際拂塵立刹竿
華帶香風巡拜路 遊人誓首散錢觀

いしとわくやとけし佛より又百のいふしとけしとて
冬に日とてふのいふしとて 羅漢堂

洲崎社

遊洲天女鼓琵琶 僧奏梵歌獻酒茶
東嶺雲連貧海浪 西林煙接富山霞
紅顏荷桶汲浮月 黃口捧盆踏落華
河漏高名鳴世久 只今唯有兩三家

たきまのいふしとてふのいふしとて
新しとてふのいふしとて

深川社

瑞籬靈社武江東 金榜烏門向鳳宮
鼓吹交鈴歌閣上 酒羹盛艫躍池中
假山高樹華無絶 間路平沙鳥不窮
飄客為欽神德者 風流自醉主人公

ちとゆる神のめみ深川よりなる水やとほ月乾
男山くらゐはほゆるや女山印志

靈巖寺

靈巖精舍海潮濤 佳境自教人披襟
柳樹正催陶令色 蓮池更發遠公心
宗風大振拂疑霧 祖月高懸照法林
此外都無染塵俗 唯遊樹下弄鶻音

大のちにめり〜かむ郭公がまはるかみみる人しや

啼やゆよ耳やとめた〜郭公

作田嶋

佃寫起煙潮水中 漁家三百望無窮
青牛馳澳間反舶 白馬蹴垠時破蓬
張網庭前愁暴雨 浮舟海上畏飄風
由來此地藤華盛 士女多歌住吉宮

みるごとく波の素く船もよるまの世はなほ人

世にたのむるはなほ世にたのむる

永代橋

永代東都第一橋 長懸漢水景光遙

芙蓉山雪接西南 嶺波嶽雲連東北 嶠

千帆張風向江颿 三又醉月鼓舷謠

若教李白遊斯上 斗酒忘歸吐百瑤

ふみふとけつらるるまの世はなほ世にたのむる

富士はけそと雲もよるや橋の上

三又江

蒸氣煽然似甑中 江城士女望涼風

船争歌舞覆河水 床競管絃滿岸滾

南海波聲都不聽 北橋人響更無窮

火華千色散天去 遊戯漸沈聞曉鐘

中よるきの風ふらふれり船とあゆむるを以て世と云ふなり
世姓中いふまうくうりうの集火うり

廻向院

傳聞江郭作灰燼 燔死葬斯十萬人
精氣咽煙嘆息絶 遊魂入火哭聲新
賢君立寺弔幽鬼 開士升堂慰冥神
面見鳴鐘歌佛號 頻思往事淚沾巾

舟よるをわたりくさりに佛佛れあふるを寺にゆき
舟よるをわたりくさりに佛佛れあふるを寺にゆき

兩國橋

漸見虹橋度兩州 萬人來往似雲浮
東西博巷張筵戲 南北長流走浪遊
歌舞鼓舩多赤裸 管絃倚檻少黃頭
晚風吹起皆狂醉 月出更無不解憂

密なるはより國の如く橋に上にならむぬのあり方
夕立やふるまじしと橋の上

江都廊

江都貨殖勝長安 數億商家總不寒
瓦屋爭光通路博 布帷競色市廊寬
陶朱頗致千金易 周白何嘗萬石難
天下繁華開此地 往還日夜似波瀾

何とわとまをうく種もりかていそふのさき家
詩 和 意 や 日 に 千 五 姓 店 ぞ

日本橋

日本橋頭日本人 浪飄來往起紅塵
牛車轟迺東西路 魚舸競捨南北垠
袖浦波聲連郭冷 芙蓉雪色接城新
只今惟倚欄干望 僧響風煙自慰神

かほくをまほしき後るなくまらさるる白のおはれし
大雪はほる間之文一日本橋

白鶴城

風聞高祖向城來 素鶴鳴天數舞回
松樹如雲千丈壘 柳營似嶺萬重陔
諸侯拱手青龍道 衆士垂裳白虎臺
正是武尊藏劍氣 誰疑雀躍比蓬萊

あはれせまきあはれしむさし野の草かりまらさるる武妻の道

あはれしむさし野の草かりまらさるる武妻の道

京華橋

春風拂面京華橋 四顧千坊霞色遙
道路大如一河溢 往來多似萬波飄
玉輿徐步輝鸞箔 金馬競馳鳴鳳鏢
自是普天無二地 鬱葱佳氣靄雲霄

みちをいへりていへりて道の川人より波風をよめるなり
雷を金とてうたふるもよまぬ

愛宕山

靈神垂跡 怨兒戀 朱殿帶霞 風色寒
芝嶺雲蘊 明月玉 櫻川水起 妙華瀾
高樓開橋 望江上 長坂階天 登樹端
窮目三千餘里外 萬山連海尚漫漫

山くふらるるをいへりていへりて道の川人より波風をよめるなり

千里の目きいへりていへりて道の川人より波風をよめるなり

金地院

梵刹蕭然 養性靈 松風自是 佛心經
竹林萬葉 拂南嶺 楓樹一株 蓋北庭
眺望園中 華已赤 徘徊殿下 柳猶青
源家長者 布金地 禪院傳燈 笑雪螢

見ぬ人なりとあつらん人の幸の庭よりきこふ事此のまじらぬ
雲の庭や日長けりてあつらん草蓋

増上寺

芝山芳刹望無窮 佛殿巍巍聳碧空
華廟輝林常馥郁 月樓映海更玲瓏
智龍二六將滂雨 義虎三千欲振風
是地新神安國始 黃金爲布賞奇功

まじらぬ事此のまじらぬ事此のまじらぬ事此のまじらぬ事

月とさく人の心とや天下一

芝神社

天日和光照世人 武城南郭玉芝濱
鳥門臨海注連淨 鳳殿開林幣帛新
嬌女振鈴爲祝禱 艷童鼓瑟作吟呻
秋張祭禮神輿外 唯有戲場薑市塵

久しき神とすしきくさくさるる瀆の松風
の仲や空しきるる市

濟海寺

蘭堂臨岸積風烟
房總山林在目前
袖浦青牛犇碧海
鐵洲白馬蹴蒼天
鳥浮魚鱗連千里
網張釣垂接萬船
靜坐回頭五雲上
悠然自詠世中仙

見よ心教之屋をたぐりし
古寺の松風の音

泉岳寺

萬松山下海潮濱
波接白雲秋色新
萩露連珠留戲者
楓林織錦繫遊人
飄風散葉良雄義
暴雨落華長矩仁
堪測古今巡此墓
悽然誓首淚沾巾

高野山のありかゝるに
高野山にありかゝるに
高野山にありかゝるに

高野寺

高野何時移此山
寺門臨谷隔塵關
四垂櫻蓋一庭上
三股松傾雙殿間
戲蝶穿華飛散亂
遊魚吹浪躍潺湲
常懸南嶽風烟畫
能使女人拜祖顏

高野山のありかゝるに
高野山にありかゝるに
高野山にありかゝるに

華ささる寺と小酒

柳管臺

柳管臺上柳管觀
窮目四幽風景寒
袖浦波聲連玉堞
芙蓉雪色接金壇
櫻華蓋谷如雲白
楓葉滿山似錦丹
往古不能遊戲處
只今無礙醉狂看

世に金銀の多きは法を離れず道徳にありのしむるは
目くろくろくふく来りてくろくくろく

善光寺

善光精舍聳青岑 古佛揚輝祇樹林
始現西天除疫鬼 終浮東海濟貧心
經行幽殿香華淨 圍繞閑庭苔葉深
世外風流無醉興 唯聞鐘響淚沾襟

何れを身よたしめ是れ而能く六のちんふの者なり月
善光寺にありては月とてくろく

望江坡

一望江城數萬家 炊烟片片似雲霞
三山光景浮池水 四谷芳流沈樹華
道路東西何有極 園林南北更無涯
百千船舶連房海 風色未殫日已斜

このふれとや大の舞は是れ世にふとあはれはをさるる雲
江戸様よりいふとやねはるは

霞關跡

往古霞關無四隣 只今見跡武城新
白山風拂虎門上 赤坂烟連龍關濱
萬馬徂徠揚埃堦 千輿進退起埃塵
皇天一作繁華地 海内朝宗貴賤人

むらり跡の雲は舞乃何とみまはるると本とあき都るうなは

おあともと天よあやうき樓のふり

山王祭

山王神徳孰能論 常護武城對國恩
金幣飄風開鳳殿 玉輿映日出烏門
柳君端笏祝言敬 藩主傾冠拜手尊
盛服清明天下一 威光嚴重照乾坤

山風乃吹々每夜一團成護寺分々法のそり火

枯木一木華やかくる寺のそり

無量山

柳營慈母號傳通 玉體金棺葬境中

螢雪孜孜輝祖月 錐繩仵仵振宗風

大江城北人聲絕 小石河南山色濃

誰為含愁閑寂地 更教法將甲關東

みづ月此面影く清く小石川なるまの光りたる如く水苔

あまのけりもまたまのや雪の窓

義藥園

若鞭草木白山園 比邱長開義藥門

病客且千迎歲月 典鑿數十送朝昏

始臨慈室與衣服 終出寂堂弔死魂

日用黃金何百兩 仰觀仁氣溢乾坤

むらゆのそらにそらゆる春れ雨ゆるよあまぬるもあな

薬のま佛一と疑ふ所是也

王子社

夷山密寺稱金輪 常祭紀南熊野神

春散妙華歌亂舞 秋開靈社躍逡巡

暮年狐火連星燧 每且鴉風向日新

幽景爭光千里外 寒林雪色醉遊人

みよの跡の極もかくや夫のふろあにたきを言れあまの

とてまきまのつとむるやあまの神といふ

飛鳥山

春日吟行飛鳥山 櫻華滿目色光斑

筑波高出白雲上 利水遠流青葉間

淑景蒸霞鶯鳴轉 微風拂露酒茶班

遊人醉此歡無極 歌舞悠悠帶晚還

名月何よばし池小わら流るみの波をえ日る井水
龍をくればなれをさすしりき

湯嶋社

遊歩神臺祇嶋間 四觀千里更無山
菅祠峙北梅彌盛 平社聳南松益殷
風拂聖林百華散 月浮袖浦萬帆還
鳥門高樹白雲上 鳳殿輝天五色斑

伊をさくくゆきみまゝ家くまかゝる風ありたちのやるなり
五更のちりまきの下とくや雲蒼の如し

孔聖堂

憲君自醉孔文王 學校開林稱聖堂
日供玉食道新曠 時燒金香德更芳
願憲風性賤神佛 修愈流言斥老莊
為報憲章文武道 將來天下大儒場

此聖の... 世の人道
ふ... や...

醫學館

官側醫門玩病人
許開學館祭農神
青襟立雪朝温故
白髮向螢晚鑿新
正見傷寒鳴仲舌
更聞中暑鼓扁唇
縱令藥戶出匙稅
莫謂權威非義仁

むぎ... 仁...
本... 報... 茶... 煙

囚獄觀

狹容被繩入獄場
吏張白眼似閻王
窮居屈膝不能睡
冷飯充飢無得湯
遠聞華色羨親友
遙見月光思故鄉
晝夜三訖淚如雨
噬臍日禱出囚障

あつはけしきしやうの雲とねふらみま袖めり
是よやうまきやうんく火よふまは虫

戲場觀

忽觀戲場容萬人
遊談立義亦論仁
士張白眼學鰕步
女散紅襟效菊顰
夫婦流言涎落袖
君臣風諫淚沾巾
可憐天下一狂界
擊拚晚嵐颯拂塵

云々
白くまきやうんく火よふまは虫

北里觀

夢遊北里暫盤桓
靜女營營行路難
蝟領蛾眉彎柳髻
金釵玉櫛飾雲鬟
高揚辨面光如雪
長引華裾香似蘭
務謹冶容微笑顧
覺來尚作美人看

あこれ名はたきりしはあー益なるのちあはよー系乃星
夕くまやけはるきみあはる女部多

大川橋

安永爲橋大水天 只今始渡見風烟
笑峰波嶽依欄峙 竹里梅村夾岸連
博卷東西張宴席 長流南北泛樓船
金龍映浪五雲色 一望何人惜二錢



雨風のそけしを耐えまぬ 船はまの河津ふらりなるは
大川橋

愛蓮庵

金龍山下媯池濱 綠竹翠松蓋四隣
幽徑遶林風拂露 古庵臨岸浪湔塵
華開庭上鳥聲淨 月落水中魚色新
瀟灑愛蓮方外地 柴門不入世遊人

世に中世の心ひらけくはま深所ゆらぐ原花ひらき子一
 留ませしころも子運はたききり

行樹坊

行樹帶霞墟拂塵　簪華坐作鳳兮呻
 紅顏抱枕狂茶店　白首拈錢醉酒帘
 夾路瑟琴搖閣屋　臨流簧鼓振樓船
 多招紫菜撓遊客　河漏也能繫戲人

わらうあのみあきんてんたやふあうりたんちる家かあきまう

新海客もくもくもくもくもくもくもくもく

望水亭

菴庵結得隱寒洲　日出蓬門繞墨流
 ノノ可憐三谷艇　乒乓堪厭兩垠樓
 天晴蚊蝶傍華戲　波靜蜻蜒點水遊
 微景細風回目去　悠然復見白泡浮

荳れ世小みあふりなる唐しあをり拂ちぬ方あふり言はせ
籬一重くよ世のちれ月色ふり

葛陂春

春日乘風出武城 遊人多戲柳橋行
梅村牛島華如錦 竹渡馬津船似鯨
稻社帶霞視流筏 葛陂藉州聽殘鶯
只今猶在中郎古 墨水鷗飛催旅情

あふり世小みあふりなる唐しあをり拂ちぬ方あふり言はせ
籬一重くよ世のちれ月色ふり

墨水秋

風起凄然墨水秋 一船客坐兩州遊
橋懸天漢月星渡 床立河根士女流
燈燭雜籠接佃島 管絃亂曲繞又洲
醉歌漸啜樂將極 夜半鐘聲入舞樓

私シも月ツキれひくひくの西ニとトいいままををひひままとといいふふ風カゼやや吹フん
ののちちくく二ニッッ月ツキももああるる如ごとくく上上

武陽夏

武陽夏至巨風頻暑似甑中汗絞巾
對食欠伸為醉者吹烟宛轉發狂人
室求少睡蠅穿目堂作長談蟻刺身
終日叫來正入夜蚊鳴帳裏更傷神

東路ハハももししるるゆゆららささののこころろニニああるるこころろニニああるるこころろニニああるる
ゆゆららささののこころろニニああるるこころろニニああるるこころろニニああるる

江坊冬

冬至暴風拂地乾祝融日怒更無安
道街擊柝巡穿履邸第敲鼓馳跨鞍
老女携孫悲苦熱少兒抱母叫飢寒
金鳴已脫烟中去回首猶為火宅看

あゝとあるに凡のちかてんかすの火やとあせさしーりり

華とて祿とてまよふはれん

省風烟

江都勝地幾千千
多日吟行遊目還
山野林川開酒席
華螢月雪肆茶筵
賤貧擊壤歌戲劇
貴富揚塵舞踰躔
縱使揮如陶謝筆
一時何得盡風烟

なまきこやこれ累ハ、
てんかすの、のちかてんかすの、のちか

筆とて祿とてまよふはれん

佛寺感

往古金仙立法門
僧尼出入小祇園
千家餬口常修學
百綴覆肩時議論
靜坐拈華開積氣
經行指月照遊魂
即今何玩人間世
日夜忽忽忘祖恩

圭五合

清々如し〜〜〜
淫盤金や〜〜〜

神社感

一入神林再拜神
二思神慮浹沾巾
清明參詣增威悅
穢惡往來損德瞋
酒肆娼坊如鳥翼
戲場遊閣似魚鱗
縱今巫覡奏神樂
神怒臭風必禍隣

い〜〜〜
社〜〜〜

儒塾感

西土古儒多聖風
肅然常止義仁中
文王又手尋姜父
孔子低頭問老翁
韓愈仰觀圓月去
陽修俯察雜華終
只今惟尚小人口
漫闢佛神貶大東

我坐此... 行...

俗家感

天下昇平貴賤人 風流不省百年身
弄華嘯月羹金翼 眺雪吟霜繪玉鱗
茶器正温千歲故 酒肴更問一時新
常催遊興忘家業 窮紀何為坐待春

たみく... 月華...

月華...

俠士行

遙望江城俠士群 形容壹是戲場君
長裳垂地如青浪 博帽翻天似黑雲
月唱狂歌將送夜 華為醉舞已迎暉
還來不見雙親面 箕踞低頭讀妓文

ちなり黒なるや黄紙つゝみくや紙赤め月と白き
ゆむちそくちのまぬ蚊やうの

妖女行

武昌妖女似游君 博櫛長釵高蹴裙
外套常垂表純色 內衣時易裏縫練
月遊河上悲朝至 華戲林中愁日曛
逸行放言勝男子 瞞然更不顧衆群

あのくちをいふまゝに
くちをいふまゝに
くちをいふまゝに

庸人行

行路忽忽不顧人 酒帘眩目解錢縑
草烟吹去燒衣服 茶湯飲來焦口唇
坐月半悲雲霧起 步華全怒雨風頻
只今惟爲醉狂樂 日夜回心拾利塵

酒多美粉茶とたのむをるはちとあつてやのさくらん

のさくらん道何とてまゝにやまのさくらん

君子行

常觀天性自安心 淡漠無為思不深

春傍山華如戲蝶 秋乘水月似遊禽

螢飛已作一入詠 雪積仍催不吟

禍福壽夭定生下 何臨窮死淚沾襟

あつちまきくらくら月華ふんふんやあつちまきくらくら

あつちまきくらくら月華ふんふんやあつちまきくらくら

舞馬場

一十七、妖童能舞馬 奮頭鼓尾皆應節

呼揚疾走五層牀 并轉高飛三榻埒

敲鐙倒懸拾扇還 踏鞍爭競交鋒別

輪回進退起疾風 不假韁鞭為曲戾

のりてはまのまをこゝろに馬と我の心ありまにかりり
馬のしや翁むろしよりのまゝ

舞犬場

老翁舞犬、犬從翁、翁披舞衣、犬委躬、
正奏管絃、躍檜上、更鳴金鼓、翠樊中、
幣鈴握足、為神樂、甲冑被身、乘面、
窺目長成、飛伏去、吠來頻告、曲難終、

けしむ目とてききし、舞犬の心とて、人やまゝ人
豈非、春のあまのつゆとく、犬のまゝ

投扇場

武都遊士好投扇、禮擬投壺、義不全、
玉机金盤暉、羽帚、錦鞞繡鞞映、毛氈、
解顏莞爾、顯開會、搓手肅然、密賭錢、
稱號揮麾、真博戲、只今何不畏公權、

勢はまはれ被るる衣はなほあまのうらみ
あまのうらみはなほあまのうらみ

衝鬪場

僧求雲富不修禪 偽振宗風慕俗縁
日賣千鈔傾玉枕 月衝萬鬪奪金錢
豈非勝入碁遊室 自是過舒博戲筵
佛祖當悲爲營寺 作來重罪向黃泉

富の名にあまのうらみはなほあまのうらみ

窮紀戲

武郭拂煤窮紀天 萬家總鼓室中筵
音如震地鳴雷響 塊似穿雲放火烟
龜足履霜翹奔走 鶴頭戴雪屈回旋
金銀無翼飛千里 遂使寒風舞市鄽

月舞子我...
傳...
...
...

孟春戲

遊目江都萬歲春
天風吹拂道無塵
白華黃鳥聲香淨
綠竹翠松光色新
金馬鳳鑣暉郭路
玉輿鸞箔映城闈
千坊霞起炊烟外
唯見清明盛服人

...
...
...

千秋樂

天下文明時至新
四方多是雅風人
醉華歌唄朱門客
狂月俳諧白屋賓
蘇婦帶書詠田界
樵夫簪筆賦河濱
只今惟祝千秋樂
坐待將來見鳳麟

治世の御代は何事と喜ぶに華にありて日々に
下をヤミと云ふに下す

萬歲樂

仁君盛德醉諸侯 垂拱宣威六十州
武偃干戈歌萬歲 文鳴簫鼓舞千秋
比城玉殿鏤冰戲 連郭金門畫雪遊
天下若無堯舜政 何為如此樂風流

凡そけりて御代は海の松の枝の如く御代は海の舟の如く
今やまた盛衰をいふに如く

日本遊

坐馳日本見風烟 山似奔波四海邊
金嶺競星佐陰地 玉津爭月紀陽天
色寒萬里芙蓉雪 光照九州瓊浦船
國內平安華洛外 諸侯拱手武城前

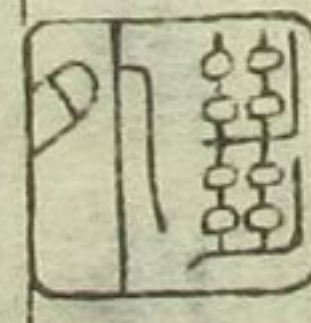
第...
目...

跋

雉之入煙也。其唯為子乎。人而不顧其子。則不如鳥者也。予雖愚且老。而入門者。二三將磨玉牒也。然不替古以焦思如火。可謂勞矣。予惻其學攀步深矣。且

淨修餘暇。不憚狂簡。自效甫曠。漫裁遊江吟。為笑具者。一百餘首。此乃雉入煙之情也。故命殺青。以授二三子云。

安永三年春跋江北金龍山



山僧忽欲利門人。短塵自振拂。硯塵柴立。遙觀文國故。箕居近想武城新。詩正不學李攀步。歌更無為紀貫曠。

裁得俳優狂簡語 將來賣笑幾千春

ちりちり子奴の海鼠くまのくまなるは水茎みるあまの

華とやまじくくろく笑ふ

南窓閣筆拜金仙 謝作遊江結戲縁

吉水風流設歌席 廬山灑落肆詩筵

良裁柳詠泣神鬼 真賦梅吟動地天

治世語言皆實相 請看妙法也如蓮

梅とよと梅の色と水のけがら妙なるはの真小く阿のる

裁とてけぐるや白華法堂

鶉居養性地天寬 鶴立不飢亦不寒

春問櫻華歌艸上 秋尋楓葉舞雲端

竹窓無聚雪螢苦 茅室有遮風雨歡

皆是江城文武德 遊吟豈作等閑看

兼よのち月にくまのくまなるは水茎みるあまの

西東もよわやうに都一様

務為堪忍世中人 言行從宜是義仁

神佛善權道當淨 聖賢巧偽德猶新

鷲飛天絶無傷翼 鯉躍淵何有毀鱗

孰謂五倫難可和 自知禮讓得相親

うまはさきさきとほるんさう忍れぬの人も道をもと

凡も俗も保たぬ人は道持南

專求清恭一遊蓮 妙樂風流異世天

相好爭光皆受記 神通競力悉成仙

往歌菩薩拈華路 還舞佛陀指月筵

自喜醍醐常醉友 笑談長在寶池邊

何もわとふふのれをそそまの園ふへくは

はらゝぬやう華くは

狂子遊江漫詠吟 終歸淨業淚霑襟

預知機法信如石 頓作厭欣行似金

弘誓船浮生死海 大教網張涅槃林

投毫自謂善權道 遂使風人入佛心

以方に人をもきくむの跡の草は露の秋のよみ月

華のよみ言は素のよみ母のよみ

江遊し人の笑まは秋のよみ見目よみ

遊江吟終



遊江吟跋

詩者感物而形於言所謂思無

邪也凡詩有六義以風為一風

者詠歌言其情職由國風矣蓋

斯遊江吟者吾師乃有所感而

賦詩歌俳各一百餘首自風景
以至於人情品藻實偽凡刺當
世可謂發藥矣予昇蘭堂頗聞
其將斷金也而今讀此詩豈殊
幸遊崑崙山我故筆所感緣以

附其尾云詩曰

吾師養性送春秋
飛錫扶桑六
十州每步山井心
結二月浮江
海思悠二三衣夜
禦寒睡一
鉢朝之除餓遊何
不投閑常置

散坐馳如此作風流

安永三年夏四月之坐

湖東釋大定拜撰



武陽芝山下玉海堂壽梓

